

—————プログラム—————

交響曲第8番 口短調 「未完成」 シューベルト

ヴァイオリン協奏曲第1番 ト短調 作品2626 ブルッフ

交響曲第7番 ニ短調 作品70 ドヴォルザーク

演奏会によせて

坂本 是忠

東京外国语大学におけるサークル活動は学生数の少ないためか、各サークルとも部員を確保することに非常に努力をしているようである。はばなしく活動を始めたサークルも、主体となって活躍した学生の卒業と共に、数年で下火となってしまったり、ひどい時には解体してしまうものまであるようである。東外大オーケストラも、かつて20年ほど前には部員が一名になってしまった事もあるという。この様な状態から、レコードコンサートを開き、クラシック音楽に興味のある学生を一人一部員に勧誘し、皆んなで小遣いを出し合って楽器を揃えたり、借りたりして、一歩一歩足場を固めて再出発したサークルだけに、体系はもとより、活動内容も毎年下ることなく前進を続けて来ているように思われる。現在70名を優に越すメンバー数を有し、演奏する曲によってはメンバーが多すぎて割りふるのに困っている有様は、実に頗もしい活躍振りと言えよう。

この様に部員がしっかりと団結出来るのも、その半数が大学に入ってから楽器を手にした初心者で、先ず楽器を使えるようにする基礎段階からの指導が、上級生と下級生とのつながりを深め、又以前から楽器を習っていた者と初めての者との助け合う心のきづなを作り、更に新しく取り組む事になった曲に全部員が一体となって向って行く、という好循環を生んでいるからだと思われる。

音楽は集団社会に住む現代人の心のオアシスと言えよう。どのように辛い時でも音楽は心を慰め励ましてくれる不思議な力を持っている。しかし人によって好む音楽が異なる事もあり、又全く自分の出番が無い曲が選ばれる事もある。しかしながらこれら部員の気持を知りながら、現実の実力や全体のバランスを考えて、オーケストラをまとめて行く苦しさも又、大変なものであろう。この苦しみはいわば社会の縮図とも言えるもので、まとめる者もまとめられる者もお互いに助け合っていかなければうまく行かない経験の場であろう。この様な体験は今後どのような社会に出ても生かせるものであり、どんなに苦しい難関にぶつかっても挫けることのない人間を造っていると思われる。東外大オーケストラは東外大におけるオアシスとして、勉強と研究に疲れた学生を励まし慰めてほしいと思う。

第18回定期演奏会を迎えるにあたって、私は今迄に卒業されたOBの方々や、色々御指導下さった方々、又暖かく御支援下さって本日御参會頂いた方々に厚く御礼申し上げると共に、今後共よろしく御願い申し上げます。又現部員の今後の活躍を期待し毎年絶えることなく美しく、心暖まる音色を、学内に響かせてほしいと願っている次第であります。

(東京外国语大学学長)

外語オーケストラを聴いた歓び

中嶋 嶺雄

一度是非聴いてみたい、と思いながら、多忙にまぎれて、その機会を失していた私は、昨年5月の第11回定期演奏会（都市センター・ホール）をようやく聴くことができた。出し物はベートーベンの交響曲「英雄」であったが、細かな講評はさしおいて感想を記すなら、よくもここまで外語オケは成長したものだ、との歓びで当夜は深い感銘を受けたことを語らねばならない。

かれこれもう20年もまえ、私が学生の頃は、オーケストラ部がまだ正式に確立していなかったが、上級生に素晴らしいトランペット奏者の桑村さん（C）、どんな楽器でも器用にこなし、作曲も編曲もまさに即興的だった今村さん（I）などの音楽好きがいて、ともかくオーケストラを「編成」していた。私は正式なメンバーではなかったが、弾き手不足のためか、2年生のときの外語祭ではコンサート・マスターをやらされた。曲目は、「アイネ・クライネ……」とか「ペルシャの市場にて」とか「トランペット吹きの子守歌」といった初步的なものだったと思う。3年生のときの外語祭には、私が中野公会堂で独奏したけれども、曲目は、モーツァルトの「ロンド・イ長調」、ウィニアフスキイの「諱詩」のほか、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタ35番を弾いたような気がするし、第2部では「トロイメライ」「ユモレスク」などのボ

ピュラーなピースをいくつか弾いた記憶がある。おのずと水準が知れるであろうが、当時、学友会の委員長だった私にたいして、聴衆のあいだから「勤評反対！」と声援が飛んだりしたものである。

それにひきかえ、今日の外語オーケストラは、堂々たる2管編成であるし、弦は総勢50名に近いではないか。いつか私の授業に出ていた外語オケのM嬢は、私が『文藝春秋』(1974年3月号)に書いたエッセイ「私とヴァイオリン」に刺激されて外語の中国科を選んだと上手なお世辞をいってくれたが、近頃の学生諸君は本を読まなくなつたかわりに、音楽の技術的水準は大いに高まっており、ともかく、私にとっては感銘深い一夜であった。

外語オケを聴いた翌週、私は「中国と国連」と題する国際シンポジウムに招かれてウィーンに4日間滞在していた。5月はちょうど、ウィーン・フェスティバルが始まるところだった。到着早々、ウィーンの「外交アカデミー」で講義したその夜は、ウィーン・フィルの“ブラームスのタベ”で、交響曲第4番と待望のM・ポリーニ演奏のピアノ協奏曲第2番を聴いた。

翌々夜はウィーン・シンフォニカだったがモーツアルトのジュピターとブルックナーの交響曲第9番の組み合せは、やはりウィーンならではのものであろう。ギュフィニの指揮が大変素晴らしい、ブルックナーが圧巻だったが、ウィーン・シンフォニカの演奏は、ウィーン・フィルにくらべるとやはり大雑把で、外語オケも、このウィーンのコンサート・ホールのような素晴らしい<会場雰囲気>のなかで演奏したら、ひょっとするとウィーン・シンフォニカくらいには肉迫できるかもしれない、と数日前の外語オケの演奏を想い浮かべた次第である。

(東外大教授、国際関係論・現代中国学)



指揮者紹介

広井 隆

南弘明、保科洋両氏に作曲を学び、また三石精一氏に指揮法を学ぶ。東京芸大入学後、ピアノを松浦豊明、松野景一、指揮を金子登、Erwin Born、渡辺暁雄諸氏に師事。昭和49年、安宅賞受賞。現在、東京芸大を卒業し、二期会オペラ、東京室内歌劇場、東京放送合唱団、佼成ウィンドオーケストラ、藤原歌劇研究所等の指揮をとっている。

広井さんが外大オケに来られて、今年で6年目。決して短い年月ではない。その広井さんが、今回の定期演奏最後に外大の常任指揮者をおりられる。クラブでの4年間（もしくはそれ以上）を広井さんと共に過ごした連中には感慨無量であろう。それだけ広井さんの「音楽」や考え方は我々に大きな影響を与えてきたのだから……。

広井さんが振り始めた頃のオケは、決して演奏技術のすぐれた連中のエリート集団ではなかったし、現在もそうである。しかしへタクソな人間達（僕も含めて）が、音楽をやめようとしなかったのは広井さんのおかげともいえる。コンパの席で音符も読めない部員を前にして「音楽」を真剣に語ってくれている広井さんを見ることがよくあった。夜を明かして語りあったこともあった。とにかく、どんな人間にも話しかけ、オケの中に入ってくれたのである。

しかし広井さんの求める音楽はあくまでも高く、我オケはなかなかそれに答えられない。何とか“音楽”にしようと苦労されて来た広井さんは、ひょとしたらバトンタッチされる指揮者にこう言われるかも知れない。——外大オケは苦労するよ、と。

何はともあれ、広井さん長い間御苦労様、そして、本当にありがとうございました。

(Mou)



第13回

定期演奏会



5.1.2:00 都市センターホール

東京外国语大学管弦乐团